

2015年3月に開設された、首都大学東京の一時保育施設、通称「首都大 KIDS」。おかげさまで利用者も増え、現在では毎日のように、本学の教職員や学生がお子さんを預けにやります。今回は、そんな「首都大 KIDS」の毎日の様子について、保育士の廣瀬聡美先生、染谷悠希先生にお話をうかがってきました。

「首都大 KIDS」の開園時間は午前8時10分から午後8時までですが、最も利用が多いのは、やはり午前9時から午後5時の間ということです。定員は5名となっていますが、1日の平均的な利用者数は2〜3名ほど。コンパクトな施設であるぶん、一人ひとりの子どもに十分目が行き届き、しっかりした保育ができるのが特徴です。



ひとりひとりの子どもに、十分に目が行き届く環境です。

室内には、季節に合わせて作られる壁面飾りがあちらこちらに飾られ、にぎやかでありながらも温かい雰囲気を出しています。もちろん、こうした飾りは保育士の先生方による手作りのもの。子どもたちが季節の行事や風物を自然に学べるよう、先生同士でアイデアを出し合いながら、制作に励んでいるそうです。

「首都大 KIDS」の近くには、緑の豊富な公園も多く、天気の良い日には外へ出て、公園での外遊びを楽しんでいるとのこと。秋のどんぐりひろいなど、季節の移り変わりを自然の中で体感できるところが外遊びの良さで、この冬に雪が積もった時には、みんな大はしゃぎだったとか。また、この3月にはちょっと足を延ばしてお花見遠足にも出かけて、満開の桜をみんなで楽しんだそうです。

季節ごとに代わる壁面飾りは、保育士の先生方の手作りです。



室内では、絵本の読み聞かせやおもちゃを使った遊びのほか、ひな人形やこいのぼりなど、季節に合わせたお絵かきや制作を自分たちでも行っています。年齢や発達段階に応じて参加できるように工夫され、0歳児でも手形や足形などをスタンプのように使うことで、楽しみながら無理なく作品づくりができるようにしているそうです。

また、毎週木曜日には英会話の「COCO 塾レッスン」が行われていることも「首都大 KIDS」の特徴の一つにあげられるでしょう。専門のスタッフが年齢別にレッスンをを行うので、それぞれの年齢に応じたステップを踏みながら、英語に親しむことができるようになっています。子どもたちの覚えるスピードは速く、簡単な英語のあいさつなどができるようになった子もいるそうです。

これからの新しい取り組みとして、「首都大 KIDS」のそばに場所をお借りして、アサガオやハツカダイコンなどを育てる予定だとか。ただ植物を育てるのではなく、種や実を収穫する体験を通じて自然に親しみきっかけになれば、とのこと。

周囲の環境に恵まれた、首都大学東京の一時保育施設、通称「首都大 KIDS」。かわいらしい子どもたちの成長をやさしく見守る、保育士の先生方の存在もまた、大きな魅力と言えるでしょう。

首都大学東京一時保育施設「首都大 KIDS」の詳細については、下記 URL でもご覧いただけます。毎月発行のかわいらしい「園だより」(これも保育士の先生方の手作りです!!)も掲載されていますので、ぜひアクセスしてください!!

<http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html>



お話をうかがった、保育士の染谷悠希先生(左)、廣瀬聡美先生(右)。ありがとうございました。

今後の予定

10月 手話検定対策講座

手話検定に向けて対策講座を行います。

11月 第2回バリアフリー講習会

障がいに関する専門家を招き、基礎知識から支援や配慮についての講習会を開催します。

10月 セクシュアル・マイノリティイベント

同性パートナーシップ条例の制定など、社会的な認知が高まりつつあるセクシュアル・マイノリティに関する課題を考える講演会を開催します。

12月 首都大学東京女性大学院生研究奨励賞表彰式

本学女性大学院生を対象に、研究に対するモチベーションを高めることを目的として実施している「首都大学東京女性大学院生研究奨励賞」の表彰式を行います。

編集後記

南大駅付近は、地面と点字ブロックを同系色にして景観は良いのですが、点字ブロックを道案内にしている弱視の三宅氏は、地面と点字ブロックの色のコントラストがないと分からないそうです。また、バリアフリーは誰もが歩きやすいようですが、全盲の築島さんにとっては目印となる階段や段差がなく歩きにくいそうです。障がいをもつ当事者のお話を伺い、誰かにとって便利なものが誰かにとっては不便になることがあるということ、多くの方に知っていただきたいと思いました。

首都大学東京 ダイバーシティ推進室  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 図書館本館 1 階  
電話：042-677-1337 (直通) / 内線 2571 FAX：042-677-1355  
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp  
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/  
発行日：平成 28 年 8 月 25 日

編集・発行

No.15 August 2016  
Newsletter  
ダイバーシティ通信

首都大学東京  
TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

2016 年度 第1回バリアフリー講習会



知っていますか、弱視(ロービジョン)のこと ~弱視の見え方と大学生活~



2016年6月28日(火) 図書館本館プレゼンテーションルームにて、2016年度第1回バリアフリー講習会「知っていますか、弱視(ロービジョン)のこと~弱視の見え方と大学生活~」を開催しました。

講師に東京都立特別支援学校の視覚障害教育部門教諭であり、ご自身も弱視の当事者である三宅洋信氏をお招きしました。講話では、弱視の基礎知識から補助機器の活用、そしてご自身のご経験も踏まえた支援や配慮について話していただきました。

**弱視(ロービジョン)について** 視覚障がいには、視力活用が困難な全盲と視力活用が可能な弱視があります。2006年の障害者手帳の統計では、日本において全盲は約11万人、弱視は約20万人います。しかし、見えにくさのある人・ロービジョンという広い概念でのくくりになると、高齢による見えにくさも含まれるため、対象者は約145万人(日本眼科医会 2009年)となります。このように、弱視者の中には障害者手帳を取得していない人も多く、統計的な把握が難しい現状があります。

また、視覚は視力、視野、色覚の三要素で構成され、どの要素に困難があるかによって見え方が異なり、補助機器の使い方も異なります。弱視の見え方は十人十色といえます。**補助機器の活用と社会生活** 近年のスマートフォン、タブレット、パソコンの普及は弱視者の情報アクセスを格段に向上させました。ICT機器の発達には弱視者の生活の幅を広げてくれるものですが、万能ではなく目的に応じて使い分ける必要があります。

また、ICT機器の活用とともに、表示の規則性を理解することも日常生活では重要になります。例えば、駅の電光掲示板の文字が見にくい場合でも、京王線では赤が特急、緑が急行・快速など、色の情報から類推することができます。様々な経験をフルに活用し、状況判断することが求められます。

補助機器の活用と、手持ちの情報を最大限に活用することが弱視者の社会生活のキーといえるでしょう。

**大学生活と展望** 三宅氏のご経験から、大学での配慮事項について紹介してもらいました。

点字ブロックの黄色は弱視者にとって、道案内の助けになります。また、プレゼンテーション資料では、反転色を使い眩しさが少ないデザインが好まれ、説明の際はなるべく具体的に話す等、周囲の理解と協力が求められます。

一方、弱視の学生本人も意識を高める必要があります。例えば、音声情報に頼り過ぎず文字情報もバランスよく活用することや、依頼することと自身で努力することの見極めも重要になります。また、周囲との良好な人間関係を保つためには、積極的な交流も不可欠です。多様な障がいの理解のために、相互関係を作っていくことも必要となるでしょう。

そして、今後の展望として、自立を意識したサポートの検討とネットワーク構築の必要性を話していただきました。**質疑応答、感想** 教員からは弱視者の使いやすいデザイン設計について、学生からは支援のあり方について、講演会終了後も意見交換が続きました。以下、感想を紹介いたします。

「講師の体験をふまえた内容になっており理解しやすかった。」「点字ブロックの色やトイレの入り口の色など、施設を整備する際に意識しようと思います。」

弱視の基礎知識から、その多様性と生活スタイルについて話していただき、支援のあり方を考えることができました。理解啓発のみならず、障がいのある学生のロールモデルの意味も込めて、今後も講習会を開催していきます。



## 手話講習会

手話のあるキャンパスコミュニティを目指して

今年度の手話講習会は例年実施している初級に加え、受講生からの希望を受け、中級のクラスも開催しました。

先日、全11回の手話講習会（初級6回、中級5回）を終え、簡単な会話や手話の読み取りが出来るようになりました。講師の方も「学生は手話を覚えるのが早い！」と驚いていたように、意欲的に取り組んでいる様子うかがえました。

また、今年度は10月に予定されている「手話技能検定」への挑戦も一つの目標としています。ある程度の単語量と表現力、読み取り能力が求められますが、手話習得のきっかけとして活用して欲しいと思います。



そして、11月には昨年度に引き続き、東京都主催の「Tokyo 手話カレッジ」が首都大学東京南大沢キャンパスで開催されます。昨年は600名以上の方が来場し、「音声によるコミュニケーション」がマイノリティとなり、「手話によるコミュニケーション」がマジョリティとなるようなコミュニケーション方法の逆転が見られました。

今年も本学の皆さんが、そのような環境に身を置くことで、手話の楽しさと奥深さを体験してもらいたいものです。

一方、学生による積極的な活動も見られ、受講生から手話サークル設立について聞きました。手話講習会やサークル、手話カレッジと様々な企画を通じて、手話が言語として学内に根付き、広がることを願っています。

中級コース受講生の感想を紹介します。

「とても有意義な講習会でした。定期的にこのような講習会があるとうれしいです。」「難しい内容もありましたが、復習もあり分かりやすかったです。会話の練習がとても良かったです。」

参加した学内関係者からは「ダイバーシティ推進室の取り組みが着実に根を下ろしているのを感じました。今後の取り組みを楽しみにしています。」と励ましの言葉をいただきました。2002年度から取り組んできた手話講習会の成果が、実りつつあると感じております。

「スポーツボランティア」という役割があるのをご存知でしょうか。スポーツをプレイヤーとして「する」のでも、観客として「見る」のでもなく、ボランティアとして「支える」。そんな役割です。笹川スポーツ財団『スポーツ白書2014』によれば、2007年に始まった東京マラソンをきっかけに、スポーツボランティアの役割が広く認知されるようになったとつです。たしかに、東京マラソンは総勢3万6500人ものランナーが都心部を駆け抜ける壮大なイベント。多くの人の協力なくしては成り立たないでしょう。東京マラソンでは、毎年およそ1万人を超えるボランティアが運営を支えています。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、スポーツボランティアの必要性は、ますます高まっていると言えるでしょう。

とはいえ、スポーツボランティアを行ったことがある人は、まだ非常に少ないのが現状です。笹川スポーツ財団が2014年に行った調査によれば、過去1年間にスポーツボランティアを行ったことがある人は7.7%。調査を始めた1994年から現在まで、ほぼ横ばいです（注1）。社会的な認知が広まったとはいえ、知ってはいてもどうすればよいのか分からない、手を出しかねている人も多いでしょう。スポーツボランティアの活動範囲は非常に多彩です。大会の運営や地域のスポーツクラブでの指導・補助のような、直接的にスポーツにかかわる活動だけではなく、海外からの参加者のホストファミリーとなること、障がい者の移動支援や、障がい者のスポーツ教室の指導・補助など、ダイバーシティにかかわる活動も数多くあります。首都大学東京ボランティアセンターでも「スポーツボランティアリーダー養成プログラム」を実施しています。まだまだ体験したことがある人は少ないスポーツボランティアですが、少しずつでもその輪が広がっていくことを願います。



支援スタッフ定例会

## 視覚障がいと視覚障がい学生支援についての勉強会

支援制度を利用している当事者の視点から、障がいや支援について考えるため勉強会を開催しました。講師役は、昨年度に続き視覚障がい学生で理工学系数理科学コース2年の築島瞬さんをお願いしました。

築島さんは幼少期の小児がんの影響で視覚障がい（全盲）となり、小学校時代は点訳ボランティアの協力を得て地域の学校で学びました。中学校からは視覚特別支援学校に進学し、点字や自立歩行など視覚障がい者としての生活スキルを身につけ、数学を専門的に学ぶため首都大学東京に進学しています。

進学の手がかりは、高校教員の勧めだったそうです。実際に高校2年生の時に首都大学東京のオープンキャンパスに参加し、点字図書が充実していることや、教職員の対応に魅力を感じたため、思い切って進学を決意したそうです。現在は、勉強だけでなく企業でのインターンシップや音楽活動などを通して、学内外で活躍しています。

会場には数理科学コースの教員や学生を中心に多くの方が参加し、具体的な困りごとや配慮について活発な意見交換が続きました。

「合理的配慮※」の提供において、お互いが丁寧なコミュニケーションを繰り返し、適切なあり方を探ることが求められます。配慮や支援について、その都度アップデートしていくことが求められるのです。これを「建設的対話」といいますが、会場のやり取りを聴きながら、これが合理的配慮のあり方なのだ、と痛感するものでした。

また、築島さんが何事にも早め早めに準備し判断していることについて、質問がありました。理由は2つあるといいます。1つは障がいのある人が、何かを行う際、調整に時間がかかってしまうことを体験的に学んでいること。もう1つは、幼い頃に小児がんを経験しているため、人生は有限であり、何事も悔いの無いように取り組みたい気持ちがあるからだといいます。多くの人がハッとさせられたのではないのでしょうか。わが身を振り返る思いでした。

誰もが思う存分学び、可能性を広げられる大学でありたいものです。

※「合理的配慮」についてはNewsletter No.14のひとくちメモをご覧ください。



支援スタッフ定例会

## 「大学のこれから」

私は社会人経験を経て、長年の夢であった大学生生活を送っています。大学で何かに参加したいと考えていた時に支援スタッフの募集を見つけたんです。最初は、看護師としての知識や経験を生かして、サポートを必要とする方々のお手伝いが少しでも出来ればという気持ちで登録しました。

◆ ◆ ◆

昨年度は、キャンパスマップや学食の点字メニューを作成する活動を行いました。またお手伝いしたい気持ちがあっても、自分に知識がないと支援ではなく迷惑になってしまつと思つていましたので、ノートイク勉強会にも参加しました。実際に書いてみると予想以上に難しかったですが、楽しく学ぶことが出来ました。ダイバーシティ推進室では、支援サポートだけでなく、様々な講習会が企画されています。特に印象に残っていることは、視覚障がい学生の築島さんが講演された時です。今までのような生活を送られてきたのか聴くことはとても良い機会になりました。支援スタッフと言いつつ、実は私の方がたくさんの方を学び、色々なことを考えさせられた1年でした。現在は手話講習会に参加し、10数年ぶりに手話を再開しました。手の動きはたいご忘れていますが、会話を通じた時の嬉しさを再度実感しています。これからの学生生活も、様々な出会いを楽しみながら、有意義なものにしたいと思つています。そして大きな目標は、サポートを必要としている方のバリアを少しでも減らせるように、支援スタッフの輪を広げることです。

## ダイバーシティ推進事業紹介～あなたの個性が生きる未来へ～ 「ダイバーシティ推進室インフォメーションセンター」

7月17日（日）と8月21日（日）の2日間、首都大学東京南大沢キャンパスにおいて大学説明会が開催されました。ダイバーシティ推進室では、これまで理系への進路選択を考えている女子中高生や保護者を対象に、理系女子向けの情報を提供する「理系女子のためのインフォメーションセンター」を開催してきました。今回は新しい試みとして、「首都大学東京ダイバーシティ推進事業紹介～あなたの個性が生きる未来へ～」と題し、これまでの理系女子に関する情報提供に加え、障がいのある学生支援の取組紹介、セクシュアル・マイノリティの基礎知識の紹介を行いました。

障がいのある学生支援の取組紹介では、本学の学生支援スタッフが行っている支援活動の内容について、ポスター展示を行いました。このポスターは、実際に支援に携わっている学生支援スタッフのみなさんが手作りで作成したもので、学内のバリアフリー環境調査の様子や、ノートイクを行う際のポイントなど、それぞれの体験に基づいた細かな情報が、手書きの温かさと相まって、とてもよく伝わるポスターになりました。来場者から学生支援スタッフに直接質問をする場面も、多く見受けられました。



学生支援スタッフ作成のポスター 支援機器の展示と操作体験

ダイバーシティ推進室で使用している支援機器の展示と操作体験も行い、来場者は、普段ではなかなか触れることのない点字タイプライターの实物に触れてみたり、音声読み上げソフトの速度の速さにびっくりしたりしながら、視覚障がいのある学生の立場を体験していました。

また、7月の大学説明会では、視覚障がいのある学生によるミニ講演会も開催しました。本学で受けた支援の体験を中心に、当事者の立場からあると良いと考える支援の内容や、これからの展望などについて、興味深い話が聞かれました。講演会の終了後には、希望者による移動支援の体験会も行い、本学への進学を希望している高校生にとっては、一足早い学生支援スタッフ体験となりました。



視覚障がいのある学生によるミニ講演会 移動支援の体験会

理系女子向けの情報提供として、今年度は、「理系女子のキャリアパス」を実施しました。本学理工学部・系、研究科の女子学生の進路状況をポスターで紹介したほか、「なぜ今リケジョ？」と題したポスター展示では、日本においては理工系の進路を選択する女性が非常に少ないため、そうした進路を選択しやすい社会を作る必要があることを説明しました。このほか、理工系に進んだ女性の事例を紹介する、文部科学省が作成したDVD『理系に行こう！You can do anything』の上映を行いました。本学の理工学部・系・研究科の女子学生の進路については、特に保護者からの関心が高く、担当スタッフの説明を熱心に聴いている場面も見られました。

また、今年度は新しい試みとして、現在社会で認知が高まっているセクシュアル・マイノリティの理解促進を目指し、セクシュアル・マイノリティの基礎知識に関するポスターと、ダイバーシティ推進室における取組紹介のポスターを展示しました。来場者の中には、セクシュアル・マイノリティを研究テーマとして、本学大学院の受験を考えている学生もおり、担当スタッフと熱心に話し込む姿が見られました。



今回は、学生支援スタッフが展示の計画や当日の運営などに多く関わってくれたこともあり、非常に活気のある雰囲気で開催できたように感じられました。来場したみなさんが、本学への進学を目指すきっかけの一つになってくれれば良いなと思っています。

## ダイバーシティとスポーツ 「「スポーツボランティア」を知っていますか？」

「スポーツボランティア」という役割があるのをご存知でしょうか。スポーツをプレイヤーとして「する」のでも、観客として「見る」のでもなく、ボランティアとして「支える」。そんな役割です。笹川スポーツ財団『スポーツ白書2014』によれば、2007年に始まった東京マラソンをきっかけに、スポーツボランティアの役割が広く認知されるようになったとつです。たしかに、東京マラソンは総勢3万6500人ものランナーが都心部を駆け抜ける壮大なイベント。多くの人の協力なくしては成り立たないでしょう。東京マラソンでは、毎年およそ1万人を超えるボランティアが運営を支えています。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、スポーツボランティアの必要性は、ますます高まっていると言えるでしょう。